

# 小学生のポストモダン絵本に対する読者反応 — ショーン・タン『いぬ』の国語科教材としての可能性 —

Readers' Responses to Postmodern Picture Books  
by Elementary School Students:  
The Potential of Shaun Tan's "Dog" as a Teaching Material  
for Japanese Language Arts

武田 裕司

池田 匡史

Yuji TAKEDA

Masafumi IKEDA

国語教育研究ユニット

岡山大学学術研究院教育学域

(令和6年9月30日受付, 令和6年12月23日受理)

## 抄録

近年、国語教育学における読むことの学習指導の領域において教材性が認められてきたものに「ポストモダン絵本」がある。一方で、日本の学習者のポストモダン絵本に対する読者反応の実際は、十分な蓄積がされていない。本研究では、小学校6年生の学習者がポストモダン絵本であるショーン・タン『いぬ』に対する初読の反応や明示的な指導のない状態での小集団の話し合いの実際から、テキストに対して主体的に意味づけを行う様子を具体的に示した。

## 1. 問題の所在

近年国語科の教材としての可能性が見出されているものに、「ポストモダン絵本」がある（足立, 2012; 山元, 2014）。ポストモダン絵本の特徴としては、おおよそ次のような点が指摘されている（スタイルズ, 2002; 谷本, 2002; 灰島, 2017; 生田, 2018）。

- ①一つの物語だけでなく複数の声を作品に描くような多層構造（複雑さ）
- ②語られ方や作品の作られ方に目を向けさせるメタフィクションとしての性質
- ③他の作品との繋がりを示唆し、読者が背景知識を用いることを求める間テキスト性
- ④絵に多くを語らせる性質
- ⑤作品の受け止め方が読者に委ねられるあいまいさ（両義性・多義性・未決定性・未完結性）
- ⑥パロディのなかにおのずと社会批判が込められるような遊戯性
- ⑦常識的な世界観をくつがえすような衝撃性
- ⑧全体の統一感を無視して異常に細部にこだわったり、断片的な世界に焦点を合わせたりするような部分の過剰と高い象徴性

これらの特徴をもつポストモダン絵本は、学習指導の場において、「自分の社会文化的背景や経験に影響されるかもしれない複数の解釈が可能」（Ryan&Anstey, 2003: 12）であるため、読者行為主体の育成につながるものと捉えられてきた（Zapata et al., 2018: 443）。しかしながら、我が国の国語教育研究においては、ポストモダン絵本を教材とした具体的な実践の開発が十分に展開されているとは言いがたい（池田・竹田, 2023）。

その原因の一つに、Pantaleo (2004) が「メタフィクションの特徴を持つポストモダン絵本に対する生徒の文学的理解や反応を実際に調査した研究は不足している」(p.2) と問題提起したようなことが挙げられる。我が国においてポストモダン絵本に対する読者反応を検討したものとしては、足立幸子 (2012) が挙げられる。ここでは小学校四年生が、ポストモダン絵本の読みにおいて、「文章に書かれていない事柄を絵から読み取って絵本の構造を理解」(p.28) することを明らかにしている。ただし、ポストモダン絵本は、作品によってその性格の異なりが多く想定されることから、国語教育研究として、様々なポストモダン絵本に対する読書反応の蓄積を行うことで、教材としての価値を精緻なものにしなければならない。

以上を踏まえ、本研究では、小学校6年生の学習者がポストモダン絵本であるショーン・タン『いぬ』に対する初読の反応や明示的な指導のない状態での小集団の話し合いの実際から、テキストに対して主体的に意味づけを行う様子を具体的に明らかにしつつ、その教材としての可能性についての示唆を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本稿では次の手順をとる。まず、調査の枠組みとして、対象となるポストモダン絵本作品を決定する。このとき、具体的な内容を踏まえつつ、その内容の分析を行う。次に、調査対象となる学習者の学年段階を検討する。これらを踏まえ、実際の読者反応を得るために行った調査の概要を確認した後に、どのような反応がみられたのか、個人による反応と小集団の話し合いを踏まえた反応に分けて検討する。そして最後に、これまでの結果を踏まえ、そこから示唆される当該絵本の国語科教材としての可能性を整理する。

## 3. 調査の枠組みの設定

### 3. 1. 対象となるポストモダン絵本『いぬ』の分析

本研究においては、ポストモダン絵本作家として知られるショーン・タンの『いぬ』<sup>1)</sup> を対象とする。その理由として、学習者視点の側面からは、ショーン・タンの作品が、日本で多く刊行されていること、また、小学生段階の読者にとって、比較的難しくない語彙の使用であることである。また研究的な側面からは、具体的に『いぬ』を対象とした議論が学問領域を問わず積み重なっていないことが挙げられる。以降では、まず本作品の特徴を分析する。このとき、表紙を「見開き①」、表紙裏と1ページ目の見開きを「見開き②」として、以降、裏表紙である見開き②⑤に至るまで、見開きの番号を振って、内容を確認する。

『いぬ』は、「かつて、わたしときみとはまったくの他者だった。」ということばが太字ゴシック体で書かれるところから物語内容が始まる(見開き⑤)。この「わたし」とは人間であり、「きみ」とは犬のことを指しているが、それぞれ特定の人間や犬を指しているのではなく、人類、犬類の相対を指しているものと捉えられる。それは、見開き②で、人種や性別、年齢など属性の異なる多様な人間の影が描かれており、それぞれの人間の隣には、犬種や大きさの異なる犬の影が寄り添っている絵が見開きいっばいに描かれていることから読み取ることができる。人間と犬との関係もそれぞれ異なっており、犬が先行して歩いているものもあれば、人間が先行して歩いているものもある。また犬にリードをつけているものもあれば、リードなしで並走しているものもあり、関係性も様々であることが読み取れる。すなわち、人間と犬との関係性をめぐる物語内容であることが想定されるのである。

先に示したような「まったくの他者」(見開き⑤)であった人間と犬との距離は、物語中、絵によって視覚的に表現されている。見開き⑥では、人間と犬が、漆黒の川と思しきものの両岸に配置され、お互いに向き合ったように見開きいっばいに描かれている。そこから、人間と犬とが、「世界はほくらのものだ！」(見開き⑦)と呼べる共生関係になっていく姿が、絵(見開き⑧)も含めて表されていく。

しかし、見開き⑨から、物語の展開は捉えにくくなる。犬である「きみ」の死と人間である「わたし」の死というイベントに言及され、「わたし」が「きみ」を川に葬り、わたしが死んで、「きみ」が川のほとりで待ち、「そうしてわたしたちのあいだを長い時が流れた。」ということが語られる(見開き⑨)。ここからは、死してなお、寄り添い合う者という関係として人間と犬とが描かれているものと想定できるように思われる。しかしながら、見開き⑩～⑱まで、見開きいっばいに、人間が左上、犬が右下に描かれ、背を向け合った様子が描かれている。人間と犬との背の間には、関係の境界を表すように、小川、線路、草原、木々と、見開きによってさまざまなものが配置されている。またそれぞれの見開きによって、人間の属性や犬の種類

も異なっており、季節や地面の土等の地理的要因も異なっている。また時代についても、描かれている構造物等から異なっていることが窺える。特に見開き⑰では、線路が人間と犬との境界に配置されていることから機関車開発以降であり、戦禍を思わせる黒い煙を発する炎の存在や墓標とおぼしき十字架、また近代兵士の恰好をした人間など、見開き⑨で語られる「死」との関係も含めて、どのようなことを表しているのか、意味の不確定性が立ちあらわれる。そして、これは見開き⑩～⑰でも同様である。

ここから転じて見開き⑱では、近代的なアスファルト舗装の道路を間にし、人間と犬が向き合う絵が描かれ、見開き⑳で、横断歩道の真ん中付近で、人間と犬とは抱き合う。文字情報としても見開き⑲で「またいっしょになった」ことが語られている。しかし、「川の流れ」などが昔とは異なることも同時に語られる。

ここまでの展開について、やや見開きを飛ばしたところになるが、見開き㉓では、意味の確定の手がかりとなるような「あとがき」も示されている。そこでは、「一万五千年もの昔から、犬と人間は数々の歴史の荒波やあまたの社会の盛衰を乗り越えて友情をはぐくみ、互いに影響を与えあってきた。」と語られ、見開き⑩～⑰も歴史の変遷を象徴的に描いているのであろうということが想定されるものの、人間と犬が直面してきた、個別具体の歴史的イベントのうち、どのような局面を描き出されているのかは不明確である。

さらに見開き㉔では、見開き⑦と同様に「世界はほくらのものだ！」ということばが繰り返される。しかし、この繰り返しは、また見開き⑩～⑰の背を向け合う関係がこの先到来することを暗示しているのかもしれない。これは先と同様、見開き㉓の「あとがき」において、「この先地球にどんな運命が待ち受けていようと、それがどんなに途方もなく過酷で、この世の終わりのように思えても、僕らの隣にはきっと犬がいて、前に進もうと僕らをいざなってくれるにちがいない。」と書かれていることとも関連する。見開き㉔、㉓では、人間、犬がどこかに向かって歩いている。それはどこに向かってなのかということは、人類、および犬類、そして我々の関係性にどのような未来が待ち構えているのかを考えることを求めているのかもしれない。そして見開き㉔に、見開き②と全く同じ絵が描かれ、物語は終わる。

以上のことから、さまざまな面における意味の不確定性を、学習者は自らが持つ情報の持ち込み、それに伴う解釈によって乗り越える余地のあるものと期待できる。

### 3. 2. 調査協力者の指定

ここまで確認したように、この絵本は、社会文化的な側面の情報を取り込みながら意味づけを行う必要のあるものと言える。そのような性格もあり、ポストモダン絵本の国語科への導入に対しては、「中・高等教育でのリテラシー教育における素材」(山元, 2014: 152)として扱うことの可能性が議論されるなど、比較的高い学年段階を対象にする向きがある(池田・竹田, 2023)。しかしながら、文学的文章に対して社会文化的な側面の情報を持ち込みながら解釈を行うような読みについては、小学校高学年段階から展開されることもまた指摘されている(難波・三原市立三原小学校, 2007)。そのため、小学校高学年段階を対象を据えることを前提とする。

以上を踏まえ、本研究では、国立大学附属小学校6年生35名を対象に調査を行うこととした。

## 4. 読者反応の結果と考察

### 4. 1. 調査概要

まず、反応の実際を検討する前に、調査の概要を確認する。調査は、2024年7月に連続する2時間で行っている。

具体的な手立てとしては、対象学習者に『いぬ』を一読してもらった後に、次の3項目の設問に対する回答を調査紙に記入してもらった。

1. この絵本を読んで、感じたことや思ったこと、不思議に思ったことを教えてください。
2. この絵本の中で、気になったところをできるだけ教えてください。
3. この絵本を読んで、あなたが見つけた「とっておきの発見」を教えてください。

なお、上記「2」の設問については、3節で示したように、表紙を①とし、裏表紙を㉔とした見開きごとの番号と反応の記入のための枠を調査紙に設け、どの見開きで何がどのように気になったのかが対応するように記述させている。特に何も気になった点がない場合は空欄にしておくことを伝えている。

また時間が余った場合、学習者が「疑問に思ったこと」を班で一つ選択し、それに対する回答を協働して検討させた。以降では、「1」の設問に対する記述を確認するとともに、学習者が協働でその回答を検討した

様子を確認する。

#### 4. 2. 絵本に対する反応箇所についての結果

##### 4. 2. 1. 反応箇所の相違

まず、初読段階における絵本に対する反応箇所についての検討である。学習者が絵本のどこに反応したのかについての傾向を明らかにするため、設問「2」について、それぞれの見開き番号（横軸）に対して記述を残した学習者がどの割合で存在したのかを縦軸に示したものが、図1のグラフである。

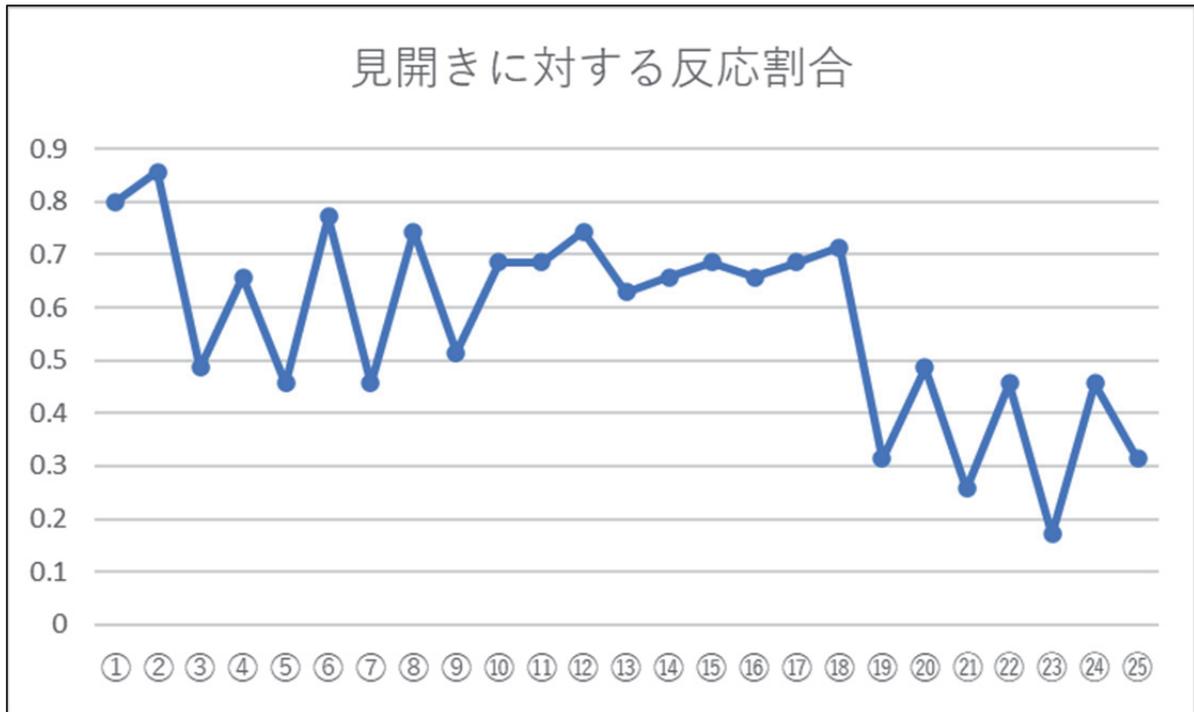


図1 絵本に対する反応箇所の比較

もっとも反応が多かった箇所は見開き②である。また、これと比較する形で同様の絵が描かれた②4への反応も多くみられた。②と②4は、多くの人々が犬を連れて歩く影が描かれている場面であり、これらの絵から人間といぬの関係性の多様さを指摘するものと、なぜ同一の絵が絵本冒頭部と終末部に配置されているのかに関する疑問が多くみられた。

さらに、絵がなく、文字のみで表現されている見開きである③、⑤、⑦、⑨に対する反応に比して、文字情報が少なく、ほぼ絵のみの見開きである④、⑥、⑧に対する反応が多くみられることも特徴の一つである。

また同様に、絵のみの見開きである⑩～⑱への反応が多いことも注目すべき点である。それぞれ、様々な時代や人種を想起させ、人間と犬が背を向けて配置されるこれらの見開きに対して、それぞれの人物やいぬ、また場所を特定しようとする反応がみられると同時に、同じ構図となっている⑩～⑱を比較しようとする反応もみられる。たとえば、⑫に対して「平安時代みたい」、⑬に対して「エジプトみたい」、⑯に対して「何かの遺跡？」などのような反応がみられた。これらから示唆されることは、文字のみの見開きに比して、文字情報のほとんどない絵主体の見開きに対する反応が数的には優位である点である。特に、『いぬ』では構図が同一の見開きが⑩～⑱にかけて配置されており、これらへの疑問や解釈、また複数ページにわたっての比較検討が行われていた。

一方で文字のみの見開き⑤、⑦、⑨などに対する反応には、印象的な一文を抜き出すものやその一文の意味づけを行おうとする特徴がみられる。たとえば、⑦に対しては「世界はほくらのものだ!」という本文中に太字で記載されている一文を抜き出す反応や、⑤に対しては本文中「かつて、わたしときみとはまったく

の他者だった。」という太字部分に対し、「犬と人が互いの関係を知ろうとした」というように意味づける反応がこれにあたる。次に、このような反応の内実に着目する。

#### 4. 2. 2. 『いぬ』に対する読者反応の内容分析

『いぬ』に対する読者反応の内容を分析するために、調査紙調査の「1. この絵本を読んで、感じたことや思ったこと、不思議に思ったことを教えてください。」に対する反応を対象として、KH Coder (樋口, 2020) を用いてテキストマイニングを行った。このデータを共起ネットワークとして示したものが、以下の図2である。なお、ここでは線 (edge) の本数を「上位 60」として表示している。

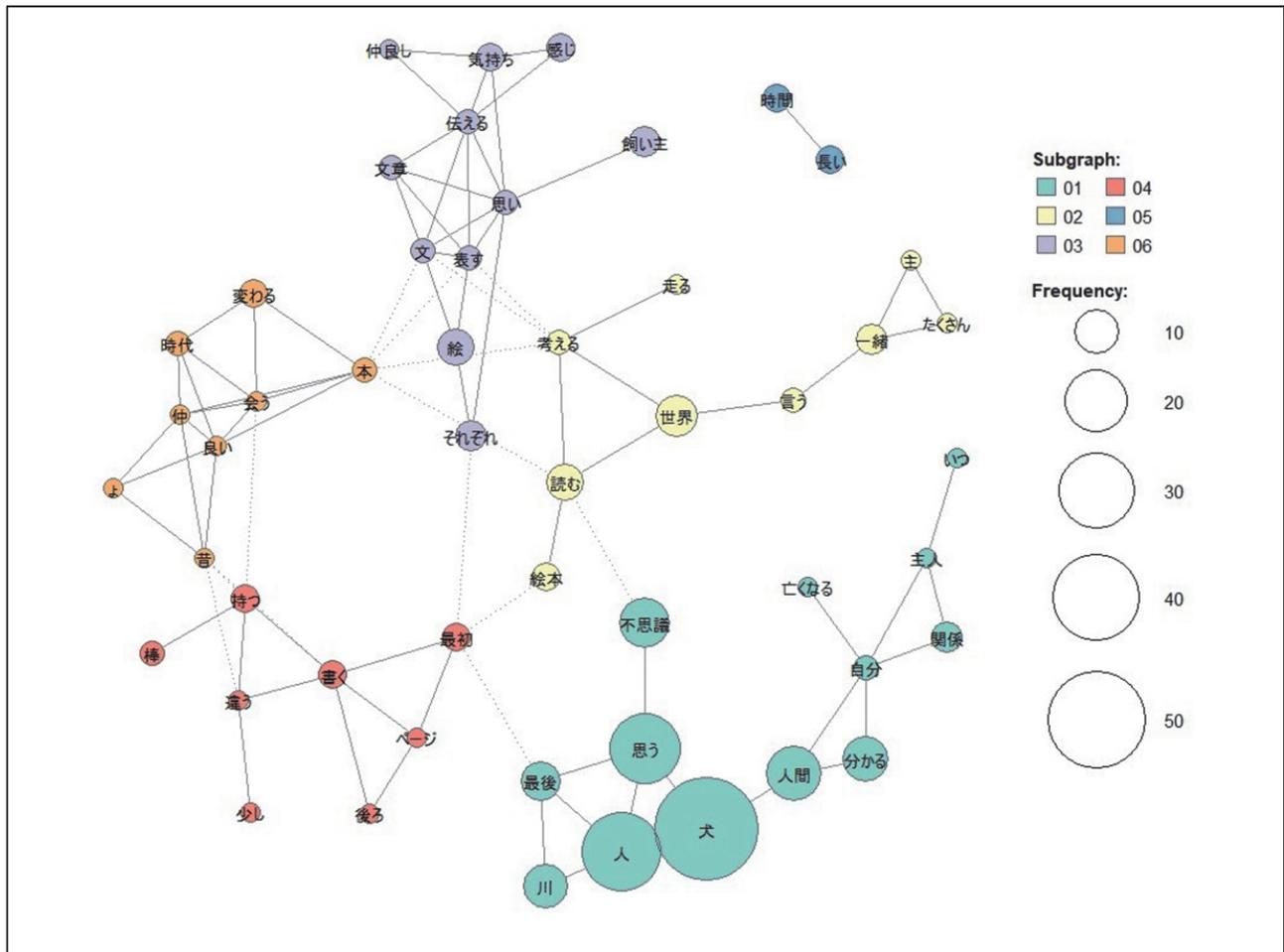


図2 『いぬ』に対する読者反応を対象とした共起ネットワーク

当然ながら、主な登場人物である「人」(「人間」と「犬 (いぬ)」という語を使用した反応が多くみられる。まず注目すべきはこれらに対して共起する語である。

ここで特徴的なものとして、「川」を挙げることができる。「川」について、初発の感想においては、「なぜ川をかくのか。」というものや、「さいしょの川みたいなのがと中でなくなったのが不思議。」といった、「川」の作品中における意味づけに対する疑問を抱く反応がみられるとともに、「きみはわたしをかわのほとりで待った」という本文中の記述を抜き出す反応もみられた。特に、作品中における「川」に対する意味づけとして、以下のような解釈を提示するものも存在した。

### 【学習者Xの「川」に対する解釈】

私は、いぬと、かい主の間に川がながれていて、それがずっとつづいていたので、いぬはかい主が死ぬまで、川のほとりでずっとまっていたのではないかな。と思いました。この川で分かれている所は、生きている人の世界と死んでいる人の世界で、最終的に、かい主も死んで、二人いぬとかい主が最後なったん（ママ）じゃないかなと思いました。

このように、主要登場人物である犬と人間という語に対して共起する「川」という語は、ポストモダン絵本に対する読者反応を分析するにあたって重要な観点となりうる。以下、「川」に着目しながら、分析を行うこととするが、ここで着目するのが調査紙調査「3. この絵本を読んで、あなたが見つけた「とっておきの発見」を教えてください。」である。

#### 4. 2. 3. 学習者が見つけた「とっておきの発見」

調査紙調査「3. この絵本を読んで、あなたが見つけた「とっておきの発見」を教えてください。」を記述後、各班において交流を行い、そののちクラス全体での共有を行った。共有された「とっておきの発見」は以下のとおりである。

#### 【各班でクラス全体に提示された「とっておきの発見」】

- (1) ②と⑭について、リードをつけていない人もいる。いろいろな時代の人と犬がいる。
- (2) ④と⑥には大きな川がながれているが、⑧にはなくなっている。犬と人間の外側にある黒い部分が川なのかもしれない。川は犬と人間の心のかべを表している？
- (3) ⑩～⑰まで、犬と人間は顔を合わせていないが、⑱で顔を合わせている。
- (4) ④と⑥は人と犬が立っている位置の色が明るい色になっており、真ん中は暗くなっている。
- (5) 犬はずっと同じ姿勢で待っている。
- (6) ①と⑳を合わせると、⑱とほぼ同じ絵が出来上がる。
- (7) ⑥などの外側の黒い部分を2冊つなげると、犬と人間が向かい合っているように見える。
- (8) ⑩～⑰では、人間が下を向いているのに対し、⑱では人間が下ではなく前を向いているように見える。

(1) や (8) については、気づくことが困難であると作品分析時には想定していたが、小学校6年生段階においてもこれらの箇所を目を向けることが可能であることが明らかとなった。

先に示したような「川」と関連する気づきとしては(2)が挙げられる。この気づきを述べた調査対象者は、本文中において明確に「川」と識別できるものが存在する見開きと、そうではない見開きがあることに着目し、「川」とされるものが何を指すのかについて再考していることが分かる。見開き④、⑥においては中央部の黒い部分が「川」として描かれているものの、見開き⑧や⑩以降にはその黒い部分は両端に描かれることとなる。なぜこのように描かれることとなったのか、またそのことが何を意味するのかについて、「川は犬と人間の心のかべを表している？」と解釈を示している。『いぬ』における、「人間と犬との関係性」のメタファーとして「川」を捉えていることがここからも指摘することができる。

#### 4. 3. 疑問点に関する議論

##### 4. 3. 1. 『いぬ』に対する疑問点の共有

上記のように初読段階における反応を共有したのち、調査では学習者同士で生まれた疑問を解決する協働が展開されている。この際には、調査紙を用いて以下の設問に回答してもらった。

#### 【各班での協働の際に提示した設問】

1. 『いぬ』の内容のなかで、みんなで話し合いたい「なぜ」を考えましょう。
2. クラスで出た「なぜ」のなかで、自分たちのグループで考える「なぜ」を選びましょう。
3. 話し合いをしたことで、読み深まったことや考えが変わったことなどを教えてください。

手順としては、「1」を記述後、各自記述した「なぜ」を班で共有し、班ごとに2～3個の「なぜ」にまとめるように指示した。そののちに、各班でまとめた「なぜ」をクラス全体に共有した。提示された「なぜ」から班で一つ選択し、10分間の話し合いの時間を設けた。以下に示すものが、クラス全体に共有した際に提示された「なぜ」である（括弧内はその謎を選択した班番号を示している）。

**【各班で提示された「話し合ってみよう『なぜ』】**

○話し合ってみよう「なぜ」

- ・なぜ人と犬が場面ごとにかわる？（2班）
- ・おびに「いぬ」と書いてあるのはなぜ？
- ・なぜ川にほうむったのか
- ・人と犬はおなじ？場所も同じ？（9班）
- ・⑮で顔を合わせたのはなぜ？
- ・⑮でうれしさをさそうなのはなぜ？（3班）
- ・なぜタイトルが「いぬ」？「にんげん」ではだめ？（1班）
- ・なぜ棒がたくさん出てくる？（5, 7班）
- ・語り手はだれ？（4班）
- ・「世界はぼくらの…」の意味は？
- ・⑮でなぜ顔を上げた？（6, 8班）
- ・②と⑭はなぜ同じ？
- ・⑩～⑮でなぜ犬は人を待つ？
- ・②にいるいろいろな犬の意味？
- ・⑩～⑮で変化する理由は？

このうち、「部分の過剰と高い象徴性」というポストモダン絵本の特徴を踏まえると、「棒」への着目は、ポストモダン絵本に対する反応を検討する上で有意であると考えられる。ここでこの班が「棒」と呼んでいるものは、見開き⑥、⑧において人間が手にしているものであり、また⑩、⑪、⑫、⑭、⑮、⑰などにみられる、人間が手にしているもしくはその付近に存在する棒状の物体を指している。一つの見方としては、狩猟用のやり、兵士のもつ機関銃、托鉢僧の杖、あるいは戦禍で燃えたことを意味するであろう葉のない木など、時代や「人間」の属性などを表すもののように思えるものではあるが、もちろんそれが何を意味しているのかについては、読者に意味の決定が委ねられているものと捉えられる。そこで以下では、「なぜ棒がたくさん出てくる？」という疑問を選択した5班での交流を手掛かりに、ポストモダン絵本に対する交流を踏まえた読者反応の変容の具体を考察する。

**4. 3. 2. 小集団での読みの交流の実際**

5班では、「なぜ棒がたくさん出てくる？」という疑問に対する交流の後、話し合った内容をクラス全体に共有した。「なぜ棒がたくさん出てくる？」という「なぜ」を選択した5班の学習者Aは、話し合った結果として、以下のように発言した。

**【学習者Aの協議後の発言】**

棒があったら川を飛び越えられるし、棒があるところの絵を見てみたら、ぜんぶ川があるところなんですよ。で、棒があったら人と犬が、高跳び棒のように使うかどうかはわからないけど、最後？最後っていうか⑳とか⑮とかは川がないから、横断歩道になってるから、棒がいらないから、人といぬが会うためにはもう棒はいらないから、その、人と犬が会うために川があったから、それを越えて人と犬が会うために棒があったと思います。

つまり、4. 2. で取り上げた「川」との関連性のなかで「棒」を捉え、それを「人と犬が会うため」と人と犬との関係性を考える際に有効なものとして解釈しようとする姿がみられるのである。先にも確認したように、作品中に数多く登場する「棒」という道具が、「川」を越えるためには重要な存在であることを指摘する発言である。この学習者Aは、グループ活動前の個人記述「とっておきの発見」において、以下のよう

**【学習者Aの協議前の記述】**

ぼうがたくさんできてきて何回もできてそれが高とびぼうということ。そしてまん中にある川や木や高いはしなどは心のかべで、どんどんちぢまっていってなくなったときに心のかべがなくなりふりかえったということ

これら学習者Aの協議後と協議前の発言と記述を比較すると、班での協議によって、⑮以降についてはなぜ「川」や「棒」が出てこなくなったのか、あるいは「横断歩道」の意味するものについての解釈が追加されているとともに、その解釈が「人と犬が会うため」という「人」と「犬」との関係性についての側面に

も影響を及ぼしているという理解がさらに精緻なものになっていったことが窺える。

以下、学習者 B, C, D と形成した小集団である 5 班での読みの交流における学習者 A の姿を考察することによって、読みの形成過程を明らかにすることとする。この 5 班においては、「棒」が指す対象を議論していた。そこで、学習者 A が「川」との関連を見出した場面が次である。

#### 【5 班における協議の様子①】

A: 待って、私分かったかも。棒。リードだ。リードだろこれ、どう見ても。  
 B: でもさ、これさ原始人が扱ってた、先に石がついた。ほら。  
 A: 原始人のやつだよ！  
 B: でもなんだっけ、ほら。火つけるやつだよ。  
 C: いや、これは先っぽに布がついてひらひらーって。  
 A: 川あるじゃん。ここに川あるじゃん。で、これをここに刺してびよーんてするやつ。なんだっけ。  
 川を渡るやつ。川あるじゃん。これを刺してびよーんてするやつ。  
 D: あつ森とかでしたことある。  
 B: 川を飛び越えるため！  
 D: ねえねえ、それくらいさ、足で飛べん？  
 B: ああ、川とかをびよーんって飛び越えるやつ。  
 A: そう、それ。  
 C: あれやん、スポーツでもあるよ。  
 A: そうそうそう。

ここで学習者 A は、「川あるじゃん。ここに川あるじゃん。で、これをここに刺してびよーんてするやつ。なんだっけ。川を渡るやつ。川あるじゃん。これを刺してびよーんてするやつ。」と発言しており、個人で記述した「とっておきの発見」を共有する姿がみられる。それに対して、他の学習者たちはゲームやスポーツ競技などから得た既有知識を働かせることによって、学習者 A の発言を理解しようとしている。このうち、それぞれの見開きにおける「棒」がどのような形状か、またどのような位置に描かれているかの話し合いが続く。そして見開き⑱について協議の対象が移った際の会話として、以下のようなものがみられた。

#### 【5 班における協議の様子②】

A: で、最後になんで棒がないかということ、川がないから。  
 B: 川がないから。  
 C・D: ああー。  
 C: すごい。  
 A: うちの※※（不明：稿者）きたわ。

ここでは学習者 A が「で、最後になんで棒がないかということ、川がないから。」と発言しており、他の学習者と「棒」に着目した際に、見開き⑱には「棒」が描かれていないことを見つけ、そのことに対する意味づけを行おうとする姿を見ることができる。ただし、この協議場面においては、「棒」の役割についての言及はなく、「川」がないことと「棒」との関係性についてまでは考察するに至っていない状況であるといえる。

しかし、班の考察内容をクラス全体に対して発表をするために班での協議をまとめる場面において、以下のような発言がみられた。

#### 【5 班における協議の様子③】

C: 棒は川を渡るばびよーんってしたもので。  
 A: 犬と人が会うためにその棒があるけど、なんか今はそんな気じゃないから棒を持ってる。  
 D: 確かに。すげーや。  
 C: 横断歩道があるね。  
 A: そう、横断歩道になっちゃった。

学習者 C の「棒は川を渡るばびよーんってしたもので。」という発言に対して、学習者 A は「犬と人が会うためにその棒があるけど、」と発言し、「棒」の役割をより具体的に検討することができている。見開き⑩～⑰までに対して、会おうと思えば会いに行ける「棒」を持つ人間が、犬に対して「なんか今はそんな気（会いたいという気分：稿者補）じゃないから」会えていないという旨の解釈を行っていることがわかる。

また、注目すべき点は学習者 C の「横断歩道があるね。」に対して学習者 A が「そう、横断歩道になっ

ちゃった。」と返答する箇所である。学習者 A は、「川」が「横断歩道」へと変化したことにより、「川」を飛び越えて人が犬に会いに行くために必要な道具であった「棒」が必要ではなくなったことを指摘しているものと考えられる。つまりこのことは、この段階こそが先に述べた「川」が描かれていないことと「棒」との関係性について検討を行っている段階であるといえる。

これらの展開によって、学習者 A は「川」や「棒」に代わり「横断歩道」が登場してきたこと、それが「人」と「犬」との関係性についても「人と犬が会う」ということに影響を及ぼしているということへの理解が深まっていったものと推察される。

自分たちの設定した疑問を追究することを目的として、小集団で再読し、協議することによって学習者 A は個人での初読を更新することができている。このような営みを喚起することができるという点にポストモダン絵本の教材価値を指摘することができる。

## 5. 結語

以上、小学校 6 年生の学習者を対象に、ポストモダン絵本であるショーン・タン『いぬ』に対する初読の反応や明示的な指導のない状態での小集団の話し合いの実際から、テキストに対して主体的に意味づけを行う様子を具体的に検討してきた。ここでは、学習者全体の傾向としては、文字のみの見開きに比して、文字情報のほとんどない絵主体の見開きに対する反応が数的には優位である点、また個別具体の学習者に着目すると、「川」や「棒」などの絵の細部が物語全体の意味との関係で、どのような意味を持っているのかということを追究していく学習者が存在していたことを示してきた。この際、学習者集団での協働によって読みを精緻なものにしていったという過程も具体的に示してきた。

これらのことが、明示的な支援をすることなく展開されたということからは、国語科の教材としての可能性が示唆される。すなわち、細部が物語全体に影響を与えるという、物語一般の読み方を意識下に置くための教材としての位置づけの可能性も示唆される。

ポストモダン絵本はその性格上、定義づけが難しいものであるが、国語科教材としての価値を十分に有するものであるといえる。今後の課題として、国語科授業実践でのポストモダン絵本の価値と可能性をより明確にするために、様々な絵本への反応を蓄積していく必要がある。

## 注

- 1) 原語では 2020 年に刊行され、日本語版は 2022 年に刊行された。これらの相違には、裏表紙に用いられている絵が異なっている点などがある。2018 年に刊行された作品集 *Tales from the Inner City* (日本語題『内なる町から来た話』, 2020 年日本語版刊行) に採録された一部を再編集したものである。

## 参考引用文献

- 足立幸子 (2012) 「ポストモダン絵本を教材にした読書指導」『新大國語』 35, 14-39.
- 生田美秋 (2018) 「ポストモダン絵本を読み解く—絵本の常識を破る絵本表現」藤本朝巳・生田美秋編著『絵を読み解く絵本入門』ミネルヴァ書房, 35-42.
- 池田匡史・竹田智美 (2023) 「高等学校国語科におけるポストモダン絵本を用いた実践像—テキストへの意味づけを促すために—」『岡山大学教育学研究科研究集録』 182, 13-22.
- スタイルズ, モラグ, 谷本誠剛訳 (2002) 「トンネルのなかで—絵本とポストモダン」ヴィクター・ワトソン & モラグ・スタイルズ編, 谷本誠剛監訳『子どもはどのように絵本を読むのか』柏書房, 56-98.
- 谷本誠剛 (2002) 「現代絵本と子ども読者」ヴィクター・ワトソン & モラグ・スタイルズ編, 谷本誠剛監訳『子どもはどのように絵本を読むのか』柏書房, 7-27.
- タン, ショーン作, 岸本佐和子訳 (2020) 『内なる町から来た話』河出書房新社.
- タン, ショーン作, 岸本佐和子訳 (2022) 『いぬ』河出書房新社.
- 難波博孝・三原市立三原小学校 (2007) 『PISA 型読解力にも対応できる文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書出版.
- 灰島かり (2017) 『絵本を深く読む』玉川大学出版部.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第 2 版』ナカニシヤ出版.

山元隆春 (2014) 『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』 溪水社.

Pantaleo, S. (2004) The Long, Long Way: Young Children Explore the Fabula and Syuzhet of Shortcut, *Children's Literature in Education*, 35(1), 1-20.

Ryan, M. & Anstey, M. (2003) Identity and text: Developing self-conscious readers, *Australian Journal of Language and Literacy*, 26(1), 9-22.

Zapata, A., Sánchez, L., Robinson, A. (2018) Examining young children's envisionment building responses to postmodern picturebooks, *Journal of Early Childhood Literacy*, 18(4), 439-464.